＜書評論文＞

宗教の多様性とその理解の方法

Roger Trigg, *Rationality and Religion.*
(Blackwell Publishers, 1998)

大　島　良　太

はじめに

「宗教とは何か」という問いが立てられた場合、それに対する適切な解答の提示を困難にしてしまう一つの要因として、宗教の「多様性」を挙げることができる。例えば、キリスト教のように体系化され、多くの信者を有する世界宗教もあれば、祈祷など呪術的色彩を多く残す民間信仰もまた宗教である。

本書の中心的なテーマは、そのような多様性を抱える宗教を理解するにあたり、人間は理性を必要とするかを問うたものである。本書の目次を列挙して全体の構成を概観しておくと、1「宗教は公に認められるべきか」、2「宗教は単なる社会的事実か」、3「あらゆる宗教は真か」、4「科学と宗教はともに合理的か」、5「宗教は歴史に依拠しうるか」、という前半部においては、宗教の多様性を指摘しながら幾つかの社会科学的アプローチを紹介し、著者はそれらの評価と批判を加える。そして中盤では、6「宗教的認識論は可能か」、7「宗教的生活形態は正当化されるべきか」、8「有神論に二元論は必要か」といったように、宗教の採るべき態度などの規範的な側面を述べていく。最後に9「信仰に理性は必要か」、10「宗教は超越神が必要か」という著者の本書での結論へと接続される。

本稿で扱うのはそのうち、宗教理解の具体的な方法について述べられた前半部（1～5章）と、著者が本書で最も力点を置く9章での議論である。著者のR.トリッグはイギリスのワーウィック大学で教鞭を執る哲学者であり、本書での議論も神の存在証明など哲学・神学的領域に傾斜する場面も多く見られる。しかし、社会科学における宗教理解とは、そうした「宗教的実在」そのものの有無に関するものではなく、あくまで「いまここ」にあ

るものとして私たちが直面している現象の「理解」を目的とするものである。そこで本稿では宗教理解の方法というものを軸に、著者が本書でなした議論と展望の意義を検討することにしたい。

1．多様性をめぐる自由主義的アプローチへの批判

ドイツの社会学者 T.ルックマンはその著書『見えない宗教』(1967) の中で、宗教の発展段階として、現代においては、教会や教団として制度化された宗教は後退し、個々人がそれぞれの生活領域の中に宗教を組み入れて、私的に構築する「見えない宗教」が優勢になると指摘し、現代の宗教の個人主義的な傾向に注目した。この「私化」の過程が進展すると、当然宗教はその信仰を持つ個人のを中心にして、新たなそして独自の意味連関を形成していくという結果が予想される。このように各人がそれぞれの信仰を持つようになると、当然宗教をめぐる価値観は多様なものとなり、様々な問題が派生してくるようになる。例えば、多くの並立する信仰を抱える近代国家においては、いかにしてそれら異なる価値観の対立を引き起こさずに真理は主張されうるか、ということが問題になってくる。また学校教育の現場などでも、進化論と天地創造の間をいかに折り合いを付けて教えるべきかという切実な問題に直面するという例もある。

こうした多様性を内包するがゆえに、宗教は本質的に論争を生み出しやすい性質のものと見なされ、それらを公平に評価するための一つの尺度として、公共の場での吟味に耐えうるかどうかという観点から、それと相容れないものは公の領域から合理的に締めだされていく、という方法が採られる場合もある。実際、前述した学校教育における宗教も、それは各家庭や教会で教えられるものとして、教育の現場からその問題自体が除外されているという現状もある。

価値の多様性とそれらの衝突という部分に注目し、それを回避するための立場の一つとして自由主義 (liberalism) が考えられる。自由主義を考える場合、この自由という概念の意味そのものが多義的であり、そもそも何をもって自由とするのか、という点に関しては議論の余地がある。例えばイギリスの政治哲学者 I.バーリンによる「二つの自由概念」(1958) でなされた「消極的自由」(個人がその欲求実現を疎外されないこと、〜からの自由) と、「積極的自由」(個人がその欲求や理性的な自我を実現すること、〜への自由) という類型などはその典型であろう。また、E.フロムの『自由からの逃走』(1941) においてなされた、個人の自由への志向とそこからの逃避という逆説的な結果を指摘した、あの有名な命題もなかなか興味深いテーマである。いずれにせよ、宗教理解における自由主義と

は、社会においてすべての人が基本的に一致する地点、というものは初めから想定せずに、その多様性や差異の事実を歓迎し、寛容であろうとする態度である。

ただここで問題になってくるのは、自由主義的な宗教理解の立場をとることによって、異質なものは異質なものとしてその存在を認められるものの、そこに価値観の一致というものを前提にしないため、公的な場での宗教の正当性は問われる必要のないもの、という結論が下されてしまうという事実である。すなわち、価値の多様性といったものには一定の対処が可能である反面、どうしても「公」という場が設定されてしまうと、そこで判断を停止してしまわざるを得ないのである（＝「公」性の欠如）。

こうした自由主義に対し、トリッグはそれが「差異を歓迎するという観点から多様性の問題に接近しようとした」という点で一定の評価を与えるものの、以下の二つの点で自由主義を批判する。まず一つ目は自由主義の寛容の精神というものは自己矛盾したものである、ということ。すなわち、「自由主義者は議論の場において、自分自身（自由主義）の肩を持てないといわれてきたが、自由主義に反対するものには寛容にはなれない」というパラドクスを内包している問題。そして二つ目の批判点として、「宗教が目指す客観的な真理への主張は、公的な世界と結局たもとを分かつことはできない」、換言すれば、公の場での吟味を必要とする信仰の主張において、はじめからそれを必要としないということを前提にした自由主義では、宗教の主張をめぐる複雑な議論には耐えられない、というものである。

トリッグの批判にもあるように、公の場での吟味という作業を避けてきた自由主義は、宗教の場以外でも「善よりも正義に優位をおいた」つまり、異質なものをともに立てることに議論の重点を置いたために、公の「徳」の崩壊を招いたと批判も受けている。本書でも代表的な自由主義者として再三引用された J.ロールズは、こうした批判を受けて、自由主義の寛容の精神を、公共文化により密接させて適用するという新たな立場へと転向していった。このように公共を視野に入れた「修正」自由主義（reformed liberalism）には、今後多様性の問題に対し新たな理解の展開が期待できるのではないだろうか。

2．宗教多元主義

前章では宗教の多様性をめぐって、そこでの葛藤を解消するための方法として「自由主義」の存在を挙げ、またそれに対する著者の批判を紹介した。自由主義は異質なもの同士が交差する地点を前提としなかったが、本章で挙げる「宗教多元主義」（religious pluralism）

は、自由主義とは異なり、多様なものが並立する現実において、それらの間に何らかの共通点を想定して議論を展開する。

そもそも「宗教多元主義」はトリッグと同じイギリスの宗教哲学者であるJ.ヒックによって掲げられたもので、多様性という問題を抱える宗教の理解の「パラダイム変換」とも言うべきものである。その著書『宗教多元主義ー宗教理解のパラダイム変換』(1985) の中で、ヒックはキリスト教を例に取りながら、キリスト教と仏教、イスラム教などのように、決して同質的な形を取らない「宗教的伝統」と、それらの中で息をし、祈り、求めて現実を「生きている」人々のそれぞれの「信仰」は本質的に異なるのか、つまり「救いの道はキリスト教以外には存在しないのか」という問いを立て、その問いへの解答になりうる選択肢として三つのもの、「排他主義」「包括主義」「多元主義」を提示する。

他の宗教を徹底して退ける「排他主義」から、他の宗教は救いの形こそ異なるものの、その根本にはキリスト教的真理が厳然として存在し、彼らの宗教はキリスト教が転じて顕現したものであるとする「包括主義」へ、という流れはそのままキリスト教の他宗理解の歴史的な発展過程とそのまま重ね合わせることができる。ヒックは、「排他主義」は言うまでもなく、「包括主義」ですらも排他性をすり替えた、結局はキリスト教中心主義にすぎないと批判し、異なる宗教を理解するための方法として「多元主義」の意義を強調する。

「多元主義」においてヒックはまず、現実に様々な形で現れている宗教の「多様性」において、それらの根本となる究極的なものが存在する、と仮定する。その究極なるものは神でも仏でもなく、とにかく「唯一の存在」であるとし、現実の様々な宗教はその唯一なるものを共有し、その共有があるからこそ、現実における多様性は大した問題でないとする。というよりはむしろ、そのような多様な形が存在するからこそ、人間は特定の宗教的パラダイムのみから真理を見ざるを得ないという認識の一面性から脱して、お互いが相補的な関係を取ることによって、その限られた認識を相関させることで、彼らが共有している唯一の究極なるもの、すなわち真理に接近することができるとヒックは言う。

宗教理解にとって困難な要素であった多様性の問題を、真理に迫るための重要な道具として読み換えた「多元主義」に対し、トリッグはそれが徹底して宗教の多様性という現実の問題に即してその解決を図ろうとしている点を評価するものの、「自由主義」の場合同様、「多元主義」が前提にした唯一なるものの存在を可能にする基盤が明確にされていない、すなわちそれが存在すると仮定した時点で、「宗教的なるものはどうあるべきかについての本質的な見方を働かせているのは明らか」で、そのことによって「排他主義」から逃れることはできないと批判する。トリッグによるこの批判は確かに「多元主義」が孕んでいる、「意図せざる排他の危険性」を警告している点で一応の評価はなされるべきものであろう。

実際ヒック自身も、どのようにして各宗教が真理について相補していくことができるかについて、具体的な方法を挙げることはできていない。しかし、自由主義が得ることができなかった、異なるもの同士の共通の地平を獲得するために、これまで桎梏でしかなかった多様性に積極的な役割をもたらし、ある種の「パラダイム変換」をなしたという意味では、「多元主義」に一定の評価が下されてしかるべきと言えよう。

3．社会科学への不信

「人間の意識や知識は、個人の心理などの内的要因のみによるのではなく、その個人がおかれている歴史や文化などといった外的要因によって拘束され、その拘束性が人間の視座構造にまで入り込み、その認識を規定している」として、「存在被拘束性」という人間の認識の一面性に注目したのはK.マンハイムであった。そしてトリッグも、社会科学が宗教を理解するに際しては、宗教的信仰やそこに息づいている様々な慣習を、個人の外側に存在する「社会的事実」として扱わねばならないとしている。トリッグは社会科学に対して、「社会科学は宗教についての理論を追求する際、宗教が社会の連帯や秩序にとってどのように重要な役割を果たしているか、といったような機能主義的説明にその重点を置きがちである」として、極めて懐疑的な姿勢をとっている。そしてまずトリッグが批判の矛先を向けたのが「現象学」的分析である。

現象学の中でも特に重要な根本概念である「現象学的還元」は、ドイツの哲学者E.フッサールが『イデーンⅠ』(1912) を初めとする著書の中で唱えた概念で、簡単に定義づけるならば「世界の存在を自明とする自然的態度をとっている間には見えていなかったものが、自然的態度を変更し世界の存在を括弧に入れることによって、世界を超越した主体の立場から捉え返すこと」である。この方法により、今まで自明なものとして認識していたものを、その認識を拘束していたものから離れて捉えなおし、日常において根本をなしている部分（生活世界）を見ることができるとされる。宗教理解の場においてもこの概念は、オランダのG.レーウらによって体系化され、宗教現象学として新たな学問的な立場を形成している。

宗教現象学においては、真理や価値の判断については宗教哲学や神学に譲り、価値判断を括弧に括ることによって、主観性からも客観性からも離れた地点から宗教現象の意味の把握に努める。トリッグによれば、この現象学的分析は、「特定の宗教生活を送る者にとって、信仰が何を意味するかを見出すことを可能にする」とし、「多くの宗教を比較して、そこにおける信仰や知識の調査を重視する点で経験的」と評価する反面、「現象の記述にウエ

イトを置きすぎるがゆえに、より深い理解や説明を求める場合には物足りない」とする。そして価値判断を括弧に括るというこの態度をとり続けていく限り、結局本質は「内部」の者にしか把握されず、「外部」からの調査者は決してそこに近づくことはできないという「現象学的不可知論」に堕してしまうと批判する。こうした批判に対し、宗教現象学の側では、「現象学的還元」によって把握された意味の一端を、その他の様々な宗教でも同様の方法で得られた意味と連結させることで、総合的な理解を図ろうとする新しい方法論が主張されてきており、不可知論への転落を回避するように努めている。

宗教が多様であることを知るためには、複数の異質な宗教を観察し、それらを比較することでそこに存在する差異に注目することが必要である。しかしこの宗教の比較を行う際に必ず直面するのがエスノセントリズム（自民族中心主義）の問題である。エスノセントリズムと言えば、E.サイードが『オリエンタリズム』(1978) の中で批判した、西洋の非西洋に対する文化的支配が著名だが、エスノセントリズムはこうした支配的総体に関する議論においてのみ表出する問題ではない。異質なものの「比較」を通して理解するという方法を採る場合、観察者は無意識のうちに自らが属している文化との類似性をそこに見出してしまっており、その類似性を自分の概念枠組を通した解釈に依存してしまうことで、認識の妥当性に疑問が生じてしまうのである。トリッグは言う。「私たちの概念は私たち自身の生活様式に必ず根付いているものであり、科学的な中立性や客観性という観念は神話であるにすぎない。この拘束性の概念をあまりにも強調しすぎると、私たちは何も発見することはできないが、それでも私たちは私自身の構造世界に住んでいることは否定できない。」しかし、「多元主義」において、ヒックが多様性にポジティヴな意味を付与して理解を行おうとしたのと同様に、トリッグも人間の認識は何らかの状況によって拘束されているという決定的な事実を明示する一方で、ではその事実を受容した上でどのようにして宗教の理解は果たされるか、という問題について彼は最後に、人間の「理性」への問いかけを掲げたのである。

4．結びにかえて

これまで見てきたように、社会科学を含めた幾つかの宗教へのアプローチに対し、ことごとく不信感を抱くトリッグだが、では一体宗教を理解するためになにゆえ「理性」への問いかけが必要なのだろうか。トリッグは江戸時代中期の日本の思想家、富永仲基による仏教の合理的批判に拠りながら、その問いへの答えを一つずつ明らかにしていく。富永は、あらゆる宗教は発展の連続した過程の結果であるとし、歴史的文脈の中で人間によって「作

られた」ものと考え、それゆえにこそ、人々が誰でも持っている「あたりまえ」の判断能力、すなわち理性に基づいた道こそが「誠の道」であるとした。

そして、トリッグはこの「作られた」という部分に注目し、宗教はあらゆる時代に通底するような超歴史的な妥当性を持つことは不可能であると述べ、人間が作り出すものであるからこそ、その時代時代に応じて宗教そのものと同時に何を妥当とするかという概念も発展的に変化していくと考える。宗教の超歴史性の否定は、神の啓示を絶対とするK.バルトら弁証法神学者の強い反発を招きかねないが、これに対しトリッグは、人間が認識の拘束というものを克服できない限り、超越的な真理（神）の存在を訴えることは、「人間はすべてを理解することができないからこそ、認識の外側に何らかの実在がある」とする見方と変わらないと批判する。これらをふまえてトリッグは、宗教が歴史の中で「いまここ」という部分で切り取られてそこに妥当性が見出されるのも理性の働きによるものであり、だからこそ、人間は自らの「あたりまえ」＝「理性」に徹底的に問いかけることで、宗教の理解に迫ることができると考えているのである。

冒頭でも述べたとおり、トリッグは宗教哲学者であることから、彼の議論は本稿では割愛した、宗教はどうあるべきかという規範的な側面にその比重が置かれがちである。そして本書全体が、キリスト教的世界観を中心とする彼の概念枠組に基づくものであるため、非キリスト教世界における問題にその議論をどこまで適用できるかや、超歴史性の否定を自明視することなどについては疑問も残る。しかし、彼が本書で展開した、理性の限界を認識した上での理性への再評価はもちろん、社会科学的方法論に対する批判的論考は、社会科学による宗教理解の試みを内省的に捉え直していく際の一助となるであろう。

参考文献

Hick,J. 1985　*Problems of religious pluralism*（間瀬啓允訳『宗教多元主義－宗教理解のためのパラダイム変換』、法蔵館、1990）

Leeuw,G. 1979　*Einfuhrung in die Phanomenologie der Religion*（田丸徳善・大竹みよ子訳『宗教現象学入門』、東京大学出版会、1979）

Sandel,M.J. 1998　*Liberalism and the limits of justice 2nd ed.*（菊池理夫訳『自由主義と正義の限界 第２版』、三嶺書房、1999）

谷泰編 1991　『文化を読む フィールドとテクストのあいだ』、人文書院

梅谷文夫・水田紀久 1984　『富永仲基研究』、和泉書院

（おおしま　りょうた・修士課程）